

Title	中世文学における伝承と信仰の基盤
Author(s)	中川, 真弓
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45717
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	中川真弓
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19126号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	中世文学における伝承と信仰の基盤
論文審査委員	(主査) 助教授 荒木 浩 (副査) 教授 後藤 昭雄 教授 平 雅行

論文内容の要旨

本論文は第一篇「嵯峨清凉寺积迦梅檀像譚の研究」、第二篇「『宝物集』第二種七卷本の研究」、第三篇「『菅芥集』の研究」、の三篇に、序章・終章を付した、400字詰め原稿用紙にしておよそ650枚ほどの論文である。

第一篇は、中世において高まる积迦信仰の潮流を基軸に見据え、中世初頭成立の説話集『宝物集』に描かれる清凉寺积迦梅檀像譚の展開と影響の分析を中心に、中世の言説発生と信仰の在処を考察しようとするものである。第一章「清凉寺の噂—『宝物集』积迦梅檀像譚を起点として—」では、清凉寺积迦梅檀像についての「三伝」と「二伝」の意味を確定する。三伝とは、1 积迦生身、2 それを模刻した優填王の梅檀像（これを本来は二伝とする）、3 その像を中国で模刻して齎然が将来したのが嵯峨清凉寺积迦像の三つに相当すること、それに対して、『宝物集』は、嵯峨清凉寺积迦像は、三伝の像なのではなく、齎然が中国から盗み取ってきた、二伝の像そのものである、と主張していることを文献学的考証により解明している。第二章「清凉寺积迦梅檀像譚の生成—『宝物集』震旦将来譚考—」は、天竺優填王の梅檀像の中国での伝来をめぐる諸説を、中国側の資料と日本中世の言説の諸相における転変とを対比して分析し、諸書において不可欠な働きをする羅什の要素を、『宝物集』が梅檀像譚のコンテキストから欠落させていることを指摘する。第三章「清凉寺积迦梅檀像譚の展開—「仏法最初の积迦像」譚—」は、優填王梅檀像他の仏法最初の仏像譚群の諸相を、中世の聖徳太子伝や和漢朗詠集注釈書群の交錯の中に探り、中世の言説の姿を浮き彫りにする。なお付章「『夢記』に見える上覚と文覚—明恵上人における积迦—」のみは、明恵の『夢記』を対象とする。明恵の积迦信仰をふまえつつ、彼の師であった上覚と、上覚の師であるとされる文覚の、『夢記』での現れ方を検証する。上覚の夢には、积迦が関連して現れることが多いことを見出すなど、通常の伝記研究からは窺えない明恵と二人の師との内面的関係を考察する。

第二篇は、『宝物集』の諸相について、第一章「第二種七卷本と片仮名古活字三卷本—道命阿闍梨と往生人列举記事をめぐって—」では往生人列举の記事から伝本の問題を探り、第二章「第二種七卷本「跋文」考—平康頼と藤原親盛をめぐる—」・第三章「第二種七卷本の和歌—『月詣和歌集』との関係をめぐって—」では、それぞれ和歌の文言と中世初頭の歌壇の分析から、『宝物集』の和歌的基盤について、新しい視点を提示し、歌林苑との関わりや、見仏・藤原親盛の伝記的考察（新資料を示している点もある）などにも言及する。

第三篇は、『菅芥集』についての初めての本格的な文献学的研究である。第一章「『菅芥集』についての基礎的考察」は、続群書類従本の『願文集』が実は『菅芥集』という名であることを証し、その新出伝本の発見と紹介、さらにそ

れら伝本の識語から浮かび上がる伝来、就中、醍醐寺義演とその周辺の禅僧との交流や伝記についても追跡・分析する。第二章『菅芥集』嵯峨念仏房関係願文考』では、『願文集』に見える念仏房関連の願文を精読し、念仏房の釈迦信仰に言及する。第三章『菅芥集』翻刻二種』は、宮内庁書陵部蔵『菅芥集』、国立歴史民族博物館蔵『菅芥集』という、新資料『菅芥集』二種の翻刻である。

論文審査の結果の要旨

清凉寺釈迦梅檀像は美術史からも注目される重要な彫像であるが、中世期の釈迦信仰の高まりとも相俟って、この像の由来をめぐって多様な言説が生み出されていく。申請者中川は、それらを丁寧に文献学的に追いかけて、紛らわしい「三伝」「二伝」の別と『宝物集』の影響を明確にし、また和歌の追跡から、仏教説話集とされる『宝物集』の和歌集的側面について、黒田彰子氏のすぐれた先行研究を前提に、いくつかの方向性を提示している。また、明恵の『夢記』という扱いにくいテキストを縦横に読み込み、仏教史的コンテクストにそれを戻して、上覚・文覚の一側面を浮かび上がらせた論は印象深い。

また『菅芥集』は、これまでほとんど認知されていなかった続群書類従の『願文集』という基礎資料の活字本を丹念に読み込み、その疑問点を見出して、その解決のため、諸本を博搜し、その資料が『菅芥集』と呼ばれるものであったことを確定した。さらに中川の追跡により、『菅芥集』の新伝本が見出され、またその書名と作品の内実から、作者を菅原為長という中世初頭の重要な鴻儒に比定し、研究史的意味を著しく高めたことも特記される。また個別の注釈的読解とを合わせて、義演と交流のあった禅僧の伝記に新見を提供し、さらに問題をより大きく、中世後期の醍醐寺という密教寺院と禅宗との関わりが示す可能性をも示唆している。また念仏房については、やや公式的に浄土宗史の中で論じられてくるばかりだったのを、願文の精読によって、嵯峨清凉寺復興をめぐる勸進の事跡を掘り起こし、また従来は阿弥陀像と誤読されていた部分を、釈迦像であると訂してその釈迦信仰を証すなど、注目すべき新見は多い。またそれら基礎資料を翻刻として付している点も学問的誠実さを示すものであろう。

しかし文献学的精緻さと裏腹なことだが、本論は嵯峨清凉寺関連に関心を絞って追跡するため、研究史総体への発言や視界が序論などでも示されず、自身の論の位置づけが弱い。ゆえに文献の細部に停滞したり、中世的言説の隘路に陥っているような部分もある。また、中世という時代規定にも、歴史学の現在への目配りが欠けている部分もあるなど、より広い視野と、中世総体を俯瞰する構想の大きさを、今後の課題として追求して欲しい。

だが、個別の研究の水準は高く、個々の論文の多くはすでに学会誌等の掲載や、学会発表等を経、高い評価を得ているものもある。本論文は、学界に裨益するところ大であると考えられる。

これらにより、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。